

10月17日（土）神戸市中央区にあるホテル北野プラザ「六甲荘」にて、平成21年度日本教育大学協会研究集会が開催された。

午前は、梶田叡一氏ら4名のパネラーによる「変革の時代の教師教育」について意見交換が行われた。午後からの第5分科会「学生から見た教員養成カリキュラムの改革」（学生発表）では、本学3回生2名と2回生1名とが、石山プロジェクト活動学生を代表して、「教育現場体験を通じた『実践的指導力』の形成ー地域密着型モデル校での教育活動よりー」というテーマで報告を行った。

### ① 石山プロジェクトの特徴

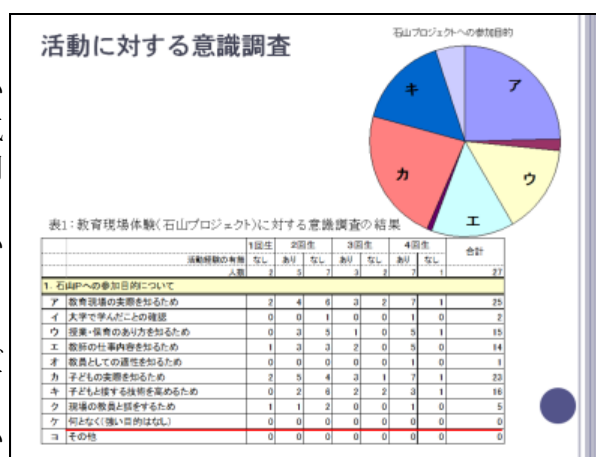
石山プロジェクトで活動する石山幼稚園（約800m）と石山小学校（約1000m）は、それぞれ徒歩10～15分程度と、ともに大学近隣の公立学校園である。そのためサポーター学生は、春または秋学期の半年間、1回生から4回生までが決まった学級（または決まった学年）に所属し保育補助や学習指導補助という活動を、講義のない時間を使って行っている。

### ② 活動に対する意識

この石山プロジェクトの特徴として、参加しているほとんどの学生が、教師になりたいという強い気持ちを持っているということが、意識調査の中で明らかとなった。（右図参照）

ただ、この参加目的は、学年によって変化していることもわかった。例えば、1回生では、“教育現場の実際を知るため”“子どもの実際を知るため”を意識して活動に取り組んでいるが、これはまだまだ経験や知識が乏しいためであり、まずは教育現場というのは実際どのようなものなのかを知りたいという意識から、活動に取り組もうとしていることが考えられる。

一方、学年が上がるにつれ、活動の目的意識の変化も見られる。“授業・保育のあり方を知るため”、“教師の仕事内容を知るため”、“子どもと接する技術を高めるため”といった意識を持つ学生が増えていることである。これは、教育現場で活動することで、ある程度視野が広がったこと、教師になろうという自覚が高まったこと、教育実習の影響などが考えられる。



### ③ 省察会を通した学び

同じ幼稚園や小学校で活動を行うといっても、実際の活動は、サポーター個人の活動であるが、それぞれ月に1回開催される省察会が、サポーターが学んだことや経験したこと、時には悩んでいることを交流し合い、活動での学びを共有し、気づきや問題解決の場となっている。

例えば、1回生のサポーターからの学習に取り組もうとしない子どもの悩みに対して、今までに同じような経験のある上回生サポーターからは、自分の経験を基に意見が出されたり、教育実習での経験が出されたりする。このような異なる視点からの意見が、これからの活動において

1回生サポーターの課題設定や、子どもを更に理解する上での大きなヒントになると考えられる。

滋賀大学では、本プロジェクト以外にも学校支援ボランティアとして多くの学生が学校園に出て活動している。子どもたちのサポートを行い、学校園の現場を知ることでは、形の上では他の学校支援ボランティアと同じかもしれないが、学生同士が省察会で意見を交流し、学びを深めるという点が、この石山プロジェクトの大きな魅力と言える。



＜第5分科会での研究報告＞